中ッ原B遺跡

―― 平成４年度県営圃場整備事業堀地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1993

茅野市教育委員会

序　　文

中ッ原Ｂ遺跡はこの度県営圃場整備事業堀地区に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

発掘調査では縄文時代の少量の遺物が発見されただけに留まりましたが、今回の発掘調査により、中ッ原Ｂ遺跡が集落址とは異なる場と考えられ、打製石斧の採集より生産域に関わる遺跡である可能性を考えることができたことは大きな成果でした。

今後広域に亘る発掘調査により縄文時代大規模な集落址の資料が得られることでしょうが、生活領域を復原するためにも中ッ原Ｂ遺跡のような小規模遺跡のもつ重要性を改めて考える必要があり、今回同時に調査された隣接する関係にある中ッ原Ａ遺跡との関係に興味深いものが有ります。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会等各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成５年２月

茅野市教育委員会
委員長　両角昭二

目　　次

序　文
第Ⅰ章　調査経緯……1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査の方法と経過……1
第Ⅱ章　遺跡の概要……2
　第１節　遺跡の地理的環境……3
　第２節　遺跡の基本的な層序……4
第Ⅲ章　遺構と遺物……4
　第１節　検出された遺物……4
第Ⅳ章　結　　語……5
図　版

第Ⅰ章　調査経緯

第1節　発掘調査に至るまでの経過

平成3年度から開始された県営圃場整備事業堀地区は、堀地区の南側の台地先端から事業が進行し、平成4年度には堀地区集落の南側一帯の台地、谷部が対象地区として事業が計画されていた。この実施地区内には「中ッ原遺跡」と呼ばれる縄文時代中期・後期の遺跡が位置していた。この遺跡の範囲を確認するために実踏を行った。その際谷を隔てて北側に緩やかな斜面を持つ台地がみられ、表面採集を実施し、その結果小規模な縄文時代の遺物が発見され、中ッ原の小字名を遺跡名としたが、既存の「中ッ原遺跡」と区別するため、既存のものをA、新発見のものをBとした。

本遺跡の保護について平成4年3月26日、長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室により、平成4年度農業基盤整備に伴う埋蔵文化財保護についての協議が行われ、その協議結果として平成4年4月2日付2教文第7－81－11号、県営ほ場整備事業（堀地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると遺跡の保護については、事業地区内にかかる500㎡以上を発掘調査し、記録保存をはかるというものであった。この計画を受け茅野市教育委員会では平成4年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。

平成4年5月11日付4諏地土第号外埋蔵文化財発掘通知を進達し、補助事業の内定を待ち事業着手という段取りであったが、圃場事業の工程より事前着手の必要性が生じた。そのために5月11日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託の契約を長野県諏訪地方事務所長と締結した。それによると総額758,000円（農政部局負担549,000円、文化財負担209,000円）で事業を行うこととし、5月26日付4教文第67号文化財保護事業事前着手届を提出し、5月27日より調査に入る。

第2節　調査の方法と経過

本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。そのため調査の主眼は台地状における遺跡の広がりと、遺構・遺物の埋蔵状況の確認であったために、任意に地形に沿った形でトレンチを設定し、必要に応じ調査区を拡張する方法とした。

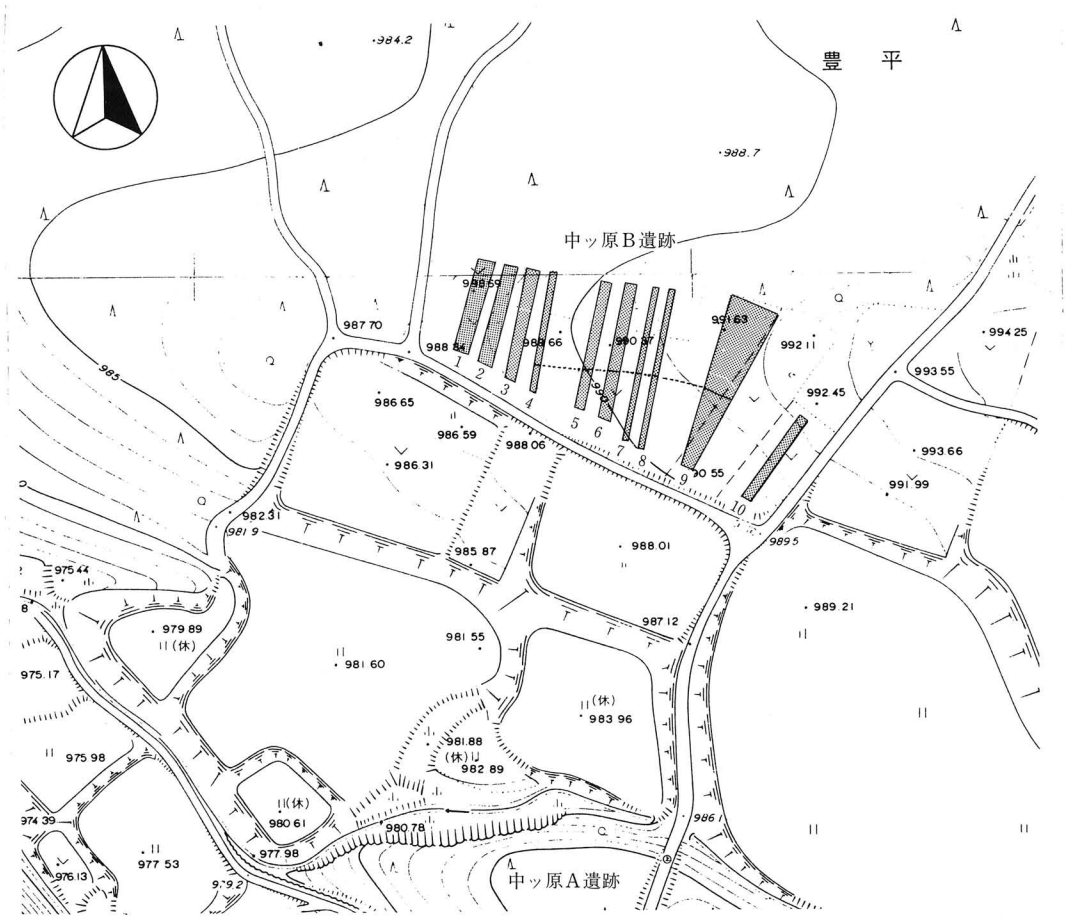
遺跡範囲の確認調査は、5月27・28日に実施した。調査トレンチは台地南側の斜面部を南北方向に切る形で、トレンチ幅は約3mで2～3m間隔をもち設定した。その結果遺構、遺物の検出はなかった。6月9日に再び重機を用い調査した部分の精査を実施した。この作業によっても遺構、遺物の確認はなされなかった。調査区全体の測量の為に公共座標の設定が行われ、y＝-25300.0を基準軸とし、A～Dの4点を下記のように設定した。A　y＝-25300.0　x＝1780.0、

B　y＝-25320.0　x＝1780.0、C　y＝-25280.0　x＝1780.0、D　y＝-25300.0　x＝1760.0。ベンチマークはAの988.334mとした。

この調査結果にもとづき、本遺跡は遺物包含層も不明確な小規模な散布地であることが確認され調査を終了した。

遺物整理、報告書作成が本格的に開始となったのは、発掘作業ができなくなる冬期に入ってからである。報告書の作成、原稿の執筆は守矢が行った。

調査組織　（事務局）教育長　両角昭二　文化財調査室長　永田光弘　係長　鵜飼幸雄　主任　両角一夫　（調査員）守矢昌文（現場担当）　小林深志　功刀　司　小池岳史　百瀬一郎　小林健治　（調査補助員）牛山徳博　（発掘作業協力者）朝倉あやめ　伊藤千代美　牛山徳子　帯川しげ　小平ツギ　小平ヤエコ　清水みゑ　森口鈴子　（遺物整理）清水園江



第１図　中ッ原Ｂ遺跡の地形と発掘区（1/1,500）

第II章　遺跡の概要

第１節　遺跡の地理的環境

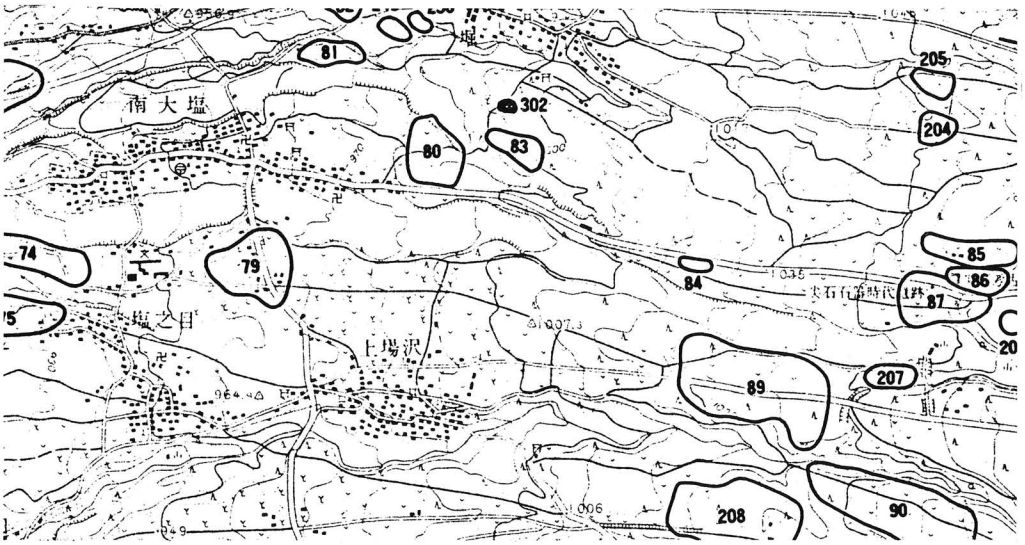
遺跡の立地　中ッ原Ｂ遺跡は、八ヶ岳の火山活動により形成された尾根状台地に立地している。中ッ原Ｂ遺跡の立地する北側に隣接し堀地区と、谷を隔てて中ッ原Ａ遺跡、立石遺跡の立地する台地と、これらの台地を挟んで南大塩地区が位置する。

遺跡の立地する台地は、堀地区から山寺地区、長倉地区にかけて延びる長い尾根状台地の一部が分岐して小規模な尾根状台地を呈している。調査前はこの南側斜面付近遺跡範囲が広がるものであろうと考えられるが、南側斜面は段状に造成され水田として利用されており、地形の旧状を把握することはできない。作付等の関係や水田造成の関係より遺跡範囲を限定するまでにはいたってはいなかった。また、今回の圃場整備事業計画地外に平坦な広い台地が続いており、現在では山林となっており遺物等の採取はできないが、地形等の状況を考えると遺跡の主体部はこの部分に展開するものかと思われる。

遺跡の立地する台地は堀地区が位置する台地などと同様に幅のある広がりを持つもので、特に台地の先端が大きく広がる形を呈する。部分的に小さな谷状の部分がみられ、湧水となる。

台地の上部は南側へゆるやかな傾斜を持っている。標高は990mである。南側の斜面は緩斜面となり沖積地面と接しているが、現在ではこの部分は造成され水田として利用されている。北側の堀地区と接する部分は八ヶ岳西南山麓台地特有の切り立った崖状で、台地上と沖積地面との比高は4mを測る。

遺物の散布状況　遺物は台地頂部の平坦な部分のやや南側によった範囲に稀薄に散布していた。このように小規模な散布地であったために、昭和54年度実施の八ヶ岳西南麓遺跡分布調査や、茅野市史等に取り上げられることがなく、その内容も明確にならなかったものであろう。



第２図　周辺の遺跡（1/25,000）

数箇所の遺跡が点在している。南側の谷を隔てて中ッ原A遺跡、立石遺跡が一つの群を形成し、昨年度調査された珍部坂A・B遺跡、水尻遺跡、城遺跡の遺跡群がやや離れて位置する。遺跡規模の差はあるが、遺跡の立地する周辺は遺跡の集中箇所として捉えることができ縄文時代の遺跡群として捉えることができ、遺跡の相互関係を調査するためには重要な地域である。

第2節　遺跡の基本的な層序

本遺跡の基本的層序は、台地頂部に南から北方向へちょうど台地を横断するように設定したトレンチにより行った。それによると遺跡の基本的層序は下記のとおりである。

Ⅰ層　耕作土　　現在の耕土で、色調は黒色で割合粘性にとんでいる。土層全体に深耕が及んでおり、ソフトな感触である。

Ⅱ層　黒色土　　色調はⅠ層より黒色味が強く割合しまっている。堆積は割合厚い。地表より桑等の根が入り込んでおり攪乱が本層に及んでいる。

Ⅲ層　黄褐色土　　ローム粒子が大きめになりその量も多くなる。漸移的な土層である。

Ⅳ層　ソフトローム

遺物包含層はⅡ層が該当するもので、表面採集により検出された遺物は深耕等により露出したものであろう。台地斜面部では耕作土の次にパミスを混入する黒色土が薄く堆積しており基盤層に至る。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　検出された遺物

今回の調査に於いて遺構は検出されず、また、遺物の包含層も明確にもできず、本遺跡が小規模な散布地であることが窺えた。図示した遺物は、遺跡確認の際と、調査前に表面採集を実施した際得られた遺物で、文様等の磨滅が著しく、また、土器片も細片で時期や、器形が判明しているものはない。これらの点数は、土器片4、陶器片2、磁器片1、打製石斧1、砥石片1でその量は大変少ない。

土器　陶磁器（図版第3図1～7）　土器片4のうち胎土、焼成等の状況よりこれらの土器片の時期を類推すると、1・2は縄文時代中期若しくは後期のものである可能性が強く、3・4は中世の内耳土器片かと思われる。5は釉色、素地等より中世陶器と思われ、6は近世陶器で7は染付けがなされる磁器茶碗である。

石器　（図版第3図8）　8は縄文時代と思われる打製石斧で、硅質粘板岩を用いた、長さ8.9cm、幅4.1cmの割合小型のものである。中世の砥石と思われる、鋸目がある砥石片がある。

第Ⅳ章　結　　語

中ッ原Ｂ遺跡は県営圃場整備事業堀地区が計画されるまでは未発見の遺跡であった。事業計画に先立ち表面採集を実施しその存在が明確になった遺跡である。今回の調査は遺跡の立地する地形が舌状台地で、台地頂部の一部にしか遺物の散布は認められなかったものの、土壙等の何らかの遺構が存在するものと考えられたため、遺跡の範囲、規模等の把握を目的に、台地の横断を切るようにトレンチを設定し調査を実施した。その結果遺構や多くの遺物は検出されず、小規模な散布地であることが判明した。このような遺跡は昨年堀地区で調査された珍部坂Ｂ遺跡、菅沢地区の箒原遺跡などが同様な内容を呈しており、これらは他の遺跡（拠点的な集落）と共存する関係を持っていたことが想定されており、中ッ原Ｂ遺跡も南側に隣接する拠点的な集落と思われる中ッ原Ａ遺跡との共存関係が考えられる。本遺跡は土器の検出数が少ないのに対して、打製石斧が１点検出されていることを積極的に捉えるならば、生産域としての性格を有していたものかと思われ、中ッ原Ａ遺跡の集落を支える生産活動の場が本遺跡であった可能性が高い。

この他の問題点として３点検出されている中世の遺物についてどのように捉えることができようか、本遺跡と同様に少量の中世遺物が検出されている遺跡は、市域の八ヶ岳山麓付近に於いては、珍部坂Ｂ遺跡（内耳土器、カワラケ）、棚畑遺跡（青磁碗、常滑甕、内耳土器）などがあるが、これらは遺構を伴わず散布地的であり、このような遺跡の性格には興味深いものがある。

今回の調査により、本来遺跡としての概念とは異なった生産域と思われる遺跡が検出されたことに意義があり、集落と生産活動の場を考える貴重な資料を得ることができ、昨年調査した珍部坂、水尻、城遺跡、今年度調査した中ッ原Ａ遺跡などとの相互関係を今後究明していく必要がある。

図版１

１．中ッ原Ａ遺跡とＢ遺跡（立石遺跡より）

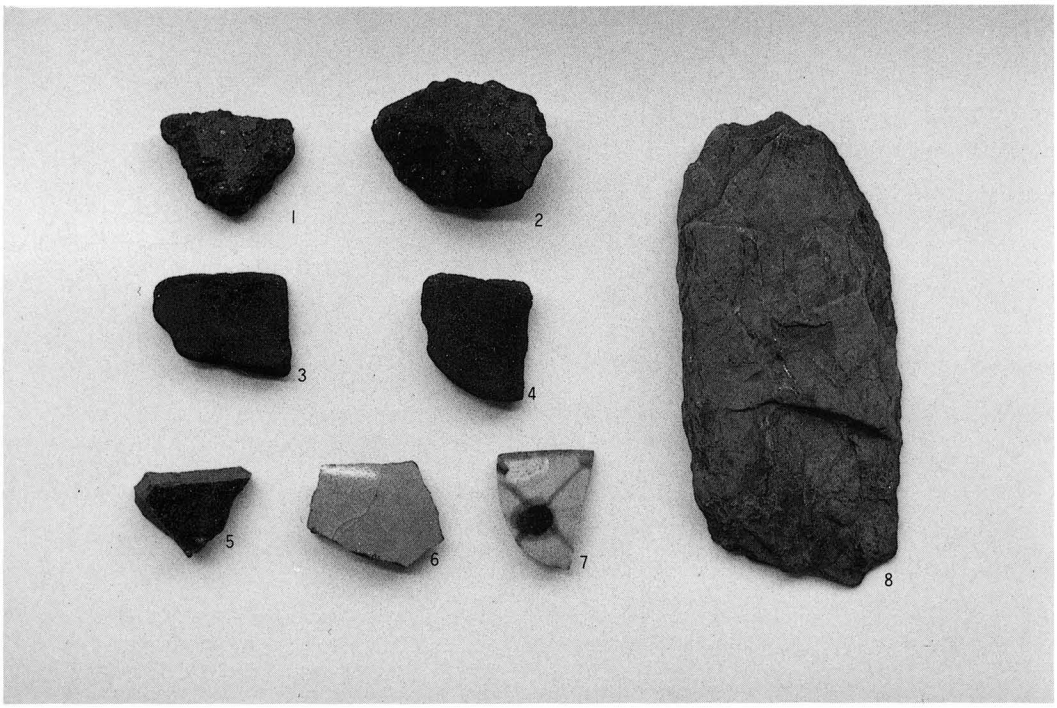
２．中ッ原Ｂ遺跡近景（中ッ原Ａ遺跡より）

3．調査風景（西側より）

4．第 2 調査区全景（南側より）

図版 3

5．第 9 調査区（南側より）



6．遺跡より採集された遺物

中ッ原Ｂ遺跡

平成４年度県営圃場整備事業堀地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成５年３月２日　印刷
平成５年３月10日　発行

編集
発行　長野県茅野市塚原２丁目６番地１号
茅野市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社